
湖畔

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湖畔

【著者名】

NZマーク

N90720

【作者名】

千葉

【あらすじ】

湖の底に足は着かない

自分の命すら捨てるほど、大切に思える人物と出会えたとしたら、

何を投げ打つてでも守りたいと思える人物と出会えたとしたら、恐らくそんな人間と出会えた事は、とても幸福な事なのだろう。何故ならそんな相手に出会えるのは、極僅かな人間だけだから。

しかしそれは同時に不幸な事もあるだらう。

それがお互いに共通の感情であるとは限らないからだ。

その人物が必ずしも自分の事もそう思っているかどうかは確実な事では無いし、むしろそうで無い事の方がずっと確率では高いからだ。

「寒…。」

首を竦めた。もう四月だというのに吹く風はとても冷たくて、まるであの日のように思つた。

彼女は死んでしまつた。こうして肌寒い春の日に。

真白なワンピースを着て、厚手のジャケットを着込んでいる俺の横を、剥き出しの白い腕を見せて走り抜けて行つた。

彼女は事ある」と、『湖の一一番底』を見てみたいと言っていた。
だからこの湖を選んだのだと想つ。

速度を緩めた彼女はやがて湖の淵で立ち止まり、ゆっくりと両足を水につけた。

そして俺を振り返った。

水辺に植えられた桜の木が、まるで氣でも狂つたかのよつに花びらを舞い散らす。

俺はそれを仰いで、その奥に透けて見える太陽を眺めた。

例えはこじが何かの物語の中であるならば、もう少し何かを考え、何かを成し遂げながら日々を生きていけるのだろう。
でも生憎な事に、此処はただの現実世界だ。

俺は特殊な能力を奮い悪と戦つたりしないし、明晰な頭脳で数々の難事件を解決したりもしない。

起承転結があり、その中で出来つ物事や感情を消化吸収し成長していくような、壮大な世界に生きては居ないのだ。

だから、大きな存在を失くしてしまおつと、
守るべきものを失くそと、

俺はただのうと生きていいくしかない。平坦な日常を続けていくしかないのだ。

「蘭。」

背後の方から控えめに自分の名を呼ぶ声が聞こえた。
振り返ると、でこぼこの道をよたよたと歩きながら、哲人が俺のもとへ寄つてくるところだった。

「君は冷えるから、帰ろ。」

哲人は俺の傍へ辿り着くと、にっこりと微笑んで言った。

「うん。」

俺も笑顔を返して頷く。

踵を返し来たばかりの道を戻り始めた哲人の後ろを歩きながら、俺はもう一度湖に眼をやつた。

冷たい北風が、水面を走つていくのが見えた。

頭の隅でぼんやりと、俺はいつかあの湖の底へ彼女を迎えて行こうと考えている。

そのいつかがいつやってくるのか解らないから、俺はよく一人でここへ来る。

今日の前を歩いているこの背中のようこそ、それを迎えに来てくれる者が居なければ、俺は今日にでもそれを実行に移したのだろうか。

湖から眼を離すと、いつのまにか哲人との距離が随分開いてしまっていた。

俺はまだ、あの背を追い、家に帰らなければいけない。

きっと、いつかは今日ではない。

俺は小さく彼女に「またね」と告げて、家路へと足を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9072o/>

湖畔

2010年11月14日07時40分発行